

氏名	西原照夫
学位の種類	医学博士
学位授与番号	甲第168号
学位授与の日付	昭和40年9月30日
学位授与の要件	医学研究科外科系産科婦人科学専攻 (学位規則第5条第1項該当)
学位論文題目	子宮頸癌根治手術患者に於ける流血及び手術創洗滌液の 細胞学的研究 特に血管侵襲並にリンパ節転移との関連について
論文審査委員	教授橋本清 教授小川勝士 教授浜本英次

学位論文内容の要旨

子宮頸癌の再発、転移に関する研究の一環として、岡山大学医学部産婦人科教室に於ける根治手術例92例を対象として、流血中、局所血中、及び手術創洗滌液中の異型細胞検出を行い、これらが出現する要因に就て、癌局所病巣に於ける血管侵襲、リンパ節転移、臨床進行期、子宮傍組織浸潤、腔壁浸潤等の観点から検討を加えた。

その結果、術前末梢血中13.0%、術中局所静脈血（子宮静脈血）中14.6%、術後末梢血中8.7%、手術創洗滌液中25.0%に異型細胞を検出した。

又局所病巣に於ける血管侵襲の頻度は29.3%であった。

次に流血中異型細胞出現因子検索の為、血管侵襲、臨床進行期、子宮傍組織浸潤、リンパ節転移の各因子に就て検討した結果、これらの間には相関が認められなかった。しかし血管侵襲とリンパ節転移との間には、明かな相関が見出された。

一方手術創洗滌液中異型細胞の出現率に影響を与える各因子に就て検討した結果、次の結論を得た。即ち腔壁浸潤、子宮傍組織浸潤、血管侵襲との間には相関が見られなかったが、リンパ節浸潤度との間には相関が認められた。これはリンパ節摘出操作によって、浸潤の著しいリンパ節から癌細胞の脱落が起る可能性を示し、従ってリンパ節廓清に当っては、特にこのことを念頭におくべきである。

ただこの脱落した癌細胞が果して予後に影響を与えるか否かに就ては、今後の追求に待たねばなら

ない。しかし、少くともこのような細胞が手術創洗滌液中に25.0%の高率に出現する事は無視出来ぬ事であり、手術療法に、化学療法、放射療法を併用する必要性のある事を示しているものとする。

尚、良性疾患開腹患者腹水中にも癌細胞と誤られ易い異型細胞を発見したが、このことは異型細胞判定に当っては慎重でなければならない事を示している。

岡山医学会雑誌 第77巻7号掲載予定

論文審査の結果の要旨

西原照夫提出の「子宮頸癌根治手術患者に於ける流血及手術創洗滌液の細胞学的研究、特に血管侵襲並にリンパ節転移との関連について」に関する学位論文につき審査した結果の要旨は次の通りである。

子宮頸癌根治手術92例を対象として、末梢血、局所静脈（子宮静脈）及び手術創洗滌液中の異型細胞の検出を行った。従前末梢血中に13.0%、術中子宮静脈血中に14.6%、術後末梢血中に8.7%手術創洗滌液中に25.0%異型細胞を検出した。

流血中の異型細胞の出現率と癌の臨床進行期、子宮傍組織浸潤程度、血管内侵襲程度、リンパ節転移頻度等の諸因子との相関を尋ねたが、特別の関係は認め得なかった。

手術創洗滌液中の異型細胞出現は腔壁浸潤、子宮傍組織浸潤、血管内侵襲との相関は認め得なかったが、リンパ節転移浸潤度の強いものに多く認められた。

これらの血中及創液中の異型細胞が将来の転移形成について如何程の影響をもつかは今後の追及に俟たねばならないが、斯様な高頻度にみられることは、子宮頸癌治療法の選定に当って手術療法単独でなく、放射線療法或は化学療法併用の有意なことが示唆されることを示している。

以上の通り本論文は新しい知見に富み、学術上有益であり、著者は医学博士の学位を授与せられるべき学力を有すること認める。